

編集後記

*今号では、所員の執筆者とともに、研究所外からアメリカ文学・文化研究の気鋭の研究者たちを迎えて、「アフリカ系アメリカ人のイメージ」の特集を組むことができた。

まず新田啓子氏は現在、一橋大学大学院言語社会研究科助教授だが、狭義のアメリカ文学にとどまらずポピュラー文化・政治文化などについて研究・批評を行っている。今回は、二〇世紀の社会・文化において機能した「人種」概念の問題含みの諸相を概観したうえで、特異な女優・作家メイ・ウェストの興味深い経歴、とくに検閲体制との交渉を分析する論考をいただいた。つづく杉山直子氏は、日本女子大学人間社会学部助教授であり、アフリカ系・アジア系文学の研究者である。氏の論考は、皮膚の色の薄い黒人が白人として通す「パッシング」の問題について、その歴史的展開を概観し、さらにその現代の変形を試みるトニ・モリソンの小説を分析している。本研究所の松本一裕の論文は、「黒人」作家ラルフ・エリソンが「黒人」の「同一性」なる概念それ自体と切り結んだ緊張を孕んだ関係

を分析している。

飯野友幸氏は、上智大学文学部教授でアメリカ現代詩が専門だが、小説家ポール・オースターや、ブルース音楽に関する編著書もあり、今回は、詩人エリオットと「黒人」大衆音楽との関わりの実相について書いていただいた（その「黒人」音楽がすでに白人聴衆との交渉において形成されていた点など）。平尾吉直氏は現在、首都大学東京国際文化学科欧米文化専攻の助手であるが、アフリカ文学やアフリカ系アメリカ文学・文化の研究者である。氏の論文は、黒塗りの戯画的な「黒人」が演じられたミンストレル・ショーについて、アフリカ系の人々がその「黒人」像に反応し対処した様相を分析する。江田孝臣氏は、早稲田大学文学部教授で、アメリカ現代詩の研究者である。今回は、とくに中心的に研究してきた詩人ウイリアム・カローズ・ウイリアムズの黒人への関心・欲望等について、諸資料の実証的検討に基づく論考をいただいた。本研究所の富山英俊は、同じウイリアムズの特異な「パッシング」小説「マイン・オーキッド」について一文を寄せた。また、本研究所のマイケル・プロンコのもの論文は、黒人作家イシユメル・リードの

小説中の、読者への策略に満ちた「黒人」イメージの提示を分析している。

こうして簡略な紹介・確認を試みて、括弧つきの表現が頻出することとなったが、これは、アフリカ系アメリカ人のイメージが、撤廃されるべき差別的像として存在するに留まらず、黒人や白人（ほか）にとって、種々の複雑な反応・応対・欲望の対象となってきたことの徴であろう。あらかじめ意図した以上に、本号の諸論文は、重なり合う主題や問題設定を示していると思う。

二〇世紀初頭のコメディアン・歌手であったバート・ウイリアムズの名前とイメージは、新田氏、平尾氏、富山の論考に登場する。本誌の表紙の二つの人物像は、そのウイリアムズの二つのイメージをトリミングして併置したものである。

なお、飯野氏と富山の論考は、〇二年十二月の日本アメリカ文学会東京支部のシンポジウム「モダニズム期のテクストにおける黒人表象」での研究発表を淵源としている。また、新田氏、江田氏、平尾氏、飯野氏には、昨年一〇月と本年一月に行なった研究所の連続公開講座の講師という形でもご協力をいただいた。あらためて感謝の意を表したい。（富山英俊）

*今回特集の一つとして掲載するのは、二〇〇五年十一月十二日に、言語文化研究所と芸術学科共催で開催した国際シンポジウム「映画／歴史／フェミニズム」の発表原稿の翻訳とコメントである。

当日のシンポジウムは進行と五名のパネリストの所属についてはチラシを参照していただきたいが簡単に補足したい。アリソン・マッキー氏は四〇年代ハリウッド古典的女性映画と物語論の研究者である。ヴィッキー・キャラハン氏はフランス映画研究を中心としているが、女性学と哲学の修士を持ち、近年多様なアプローチからメディア、女性、歴史の問題に取り組んでいる。ジャネット・スタイガー氏はアメリカ映画史、とりわけハリウッド映画史の第一人者として世界的に著名な学者の一人である。続くパトリシア・ホワイト氏は気鋭のクイア映画理論家であり、またNYにあるウイメン・メイク・ムーヴィーズの顧問としても活躍している。そして、ローラ・マルヴィ氏は映画学のみならず美術史から文学まで影響を与えた「視覚的快楽と物語映画」の著者として、また『スフィンクスの謎』を始めとするピーター・ウォレン氏との共同映画製作者としても知られる。残念

ながら原稿では再現できないが『紳士は金髪がお好き』のマリリン・モンローの一瞬の姿をスロー・モーションで捉え、映像を反復するという魅惑的なビデオ映像を伴いながらの講演は、大変印象深いものであった。

コメントーターを努めていただいたのはホワイト氏のコメントを担当した本学芸術学科助教授の斉藤綾子を除いて、以下の四名の方である。まず、愛知県立大学外国学部英米学科教授で、文学と映画を古典的メロドラマとフェミニズムの観点から研究している野沢公子氏が「女性映画」に関して総括的かつ的確なコメントをして下さった。本学芸術学科非常勤講師として教鞭を執って頂いている鷺谷花氏がセレブのロマンスに関して、日本から香港へと文脈を広げ問題提起を下さった。マキノ・プロジェクトを始め、京都のアーカイヴ・リサーチに詳しい立命館大学文学部人文科学総合インスティテュート助教授の富田美香氏は豊富なビジュアル資料を駆使して、日本映画のヴァンプ像についてコメントして下さった。そして『ジェンダー・トランプル』を始めとするジュディス・バトララーの翻訳者として知られ、精神分析フェミニズム

理論の第一人者であるお茶の水女子大学人間文化研究所教授の竹村和子氏が洞察溢れるコメントでマルヴィ氏の議論をさらに広げて下さった。

原稿の翻訳は川口恵子さん（東京大学大学院総合文化研究科博士課程在籍）、中井真木さん（東京大学大学院総合文化研究科博士課程在籍）、山口菜穂子さん（お茶の水女子大学大学院人間科学研究科博士後期課程在籍）、笹川慶子さん（早稲田大学、日本女子大学非常勤講師）、水野祥子さん（カリフォルニア大学ロサンゼルス校映画・テレビ・メディア学部批評学科学士候補）に協力して頂いた。優秀な彼女たちの協力無しには今回のシンポジウムと論文掲載は叶わなかった。発表とコメントに続いては、斉藤綾子の司会の元にデイスカッションが行われた。長時間のシンポジウムにもかかわらず、有意義な議論が繰り返された。シンポジウムでは限られた時間内で発表を割愛せざるを得なかった場合もあり、いざれにしても本特集で発表原稿が全文翻訳され、改めてその豊かな内容を確認していただければ幸いである。

最後に、シンポジウムが実現できたのはひとえに多くの方の協力あってこそで

ある。パネリスト、コメンテーター、翻訳者の方々、研究所所員・委員の皆さん、芸術学科のスタッフ、大学院の学生に感謝したい。そして長時間にもかかわらず熱心に耳を傾けてくださった聴衆の方にもこの場を借りてお礼を申しあげたい。今回のシンポジウムを一つのきっかけとして、映画に限らず、視覚文化、文学など超域的に理論的な思索が一層深まっていくことを願いたい。(斉藤綾子)

*『言語文化』第二十三号をお届けする。本号の特集については英文学科の富山英俊教授に編集をお願いし、また十一月に開催されたシンポジウム「映画／歴史／フェミニズム」については、芸術学科の斉藤綾子助教授にお願いしてその記録を本号に掲載した。

それ以外の論文について簡単に紹介すると、まずフランス語で書かれた二つの論考は、十月に本研究所が主催した講演会の記録である。エリック・マルティ氏はパリ第七大学フランス文学・現代文学部教授。ドミニク・ドゥクルセル氏はCNRRS(フランス国立科学研究センター)の研究指導教授で、国際哲学コレージュやエコール・ノルマルでも講義を担

当されている。なおマルティ氏の講演についてはすでに、「バルト『恋愛のディスクール』をめぐって」という題で、雑誌『みずすず』(みずすず書房)の第五三四号(二〇〇五年十二月)に、フランス文学科石川美子教授による翻訳が掲載された。三宅良美氏は秋田大学教育文化学部助教授(六月に「想像のフェミニニティー——ジャワの言語と舞踏」と題するたいへん興味深い講演をしていたのだが、それに関連する新たな英文原稿を本誌のために頂戴した。一橋大学大学院言語社会研究科教授のイ・ヨンスク氏の論文は、二〇〇三年十二月に当研究所でおこなっていたいただいた講演会に基づくものである。当方の手違いで掲載が大幅に遅れ、ご迷惑をおかけしたことをここにお詫び申し上げる。

二〇〇五年度の言語文化研究所のそのほかの活動についても、簡単にご報告しておきたい。十月には明治学院大学で日本音楽学会の全国大会が開催されたが、それに合わせて芸術学科との共催で「リゲティと二十世紀音楽」という特別セミナーが開かれ、ロンドン大学のレイチェル・ベックルズ・ウィルソン氏に講演をお願いした。十一月には大学院文学研究科

英文学専攻の設立五十周年記念への共催として、中央大学名誉教授早乙女忠氏による「喜びの訪れ——C・S・ルイスと女性たち」、十二月には京都大学の岡真理氏による「パレスチナ 記憶の詩学と政治学」という二つの講演会が開催された。また十二月には内外十名の方々をお招きして、すでに恒例となった「ポエトリー・リーディング」の第五回を盛大に催すことができた。さらに本号の特集に関連して、十月と一月にはあわせて四人の方々による「アメリカ文学・文化におけるアフリカ系アメリカ人のイメージ」に関する講演会がおこなわれた。またそうした講演会活動とは別に、英文学科佐野哲也教授を中心とした言語心理学研究会による「子供の発話資料作成プロジェクト」が現在進行中である。

こうしてみると、継続的におこなわれている多くの読書会なども含めて、今年度もなかなか多彩でユニークな活動ができたのではないかとひとひそかに自負している。朝比奈はこの三月で所長の任期を終え、英文学科の岡本昌雄教授にパトントッチすることになるが、今後とも一層のご協力ご支援をお願い申し上げます。(朝比奈弘治)